



芦屋市出身 ピアニスト&作曲家

# 松永貴志の挑戦

「日本のジャズ発祥の地」とされる神戸。阪神間とともにライブハウスやジャズ喫茶などが集まり、ここで育った数多くのミュージシャンが内外のジャズシーンで活躍する。芦屋市出身のピアニストで作曲家の松永貴志さんもその一人だ。中学時代、ジャズピアノの巨匠ハンク・ジョーンズに「ずばぬけた演奏」と絶賛された「天才少年」も26歳に。日本を代表する若手アーティストとして、東京を拠点に、ジャズにとどまらず、ジャンルの壁を越え精力的に活動する。一方で、阪神・淡路大震災の経験から東日本大震災の被災地支援にも力を注ぐ。来年はCDデビューから10年。さらなる飛躍が期待される音楽家が目指す次のステージとは。

## ジャンルを越えたコラボレート

夏休みが始まって間もない7月27日、松永さんのコンサートが地元芦屋市で開かれた。会場は同市業平町の市民センター・ルナホール。松永さんにとっては、15歳のデビューリサイタル以来、幾度となく演奏を披露してきた、「ホームグラウンド」ともいえる舞台だ。

「スペシャルコラボレーション」と題されたこの日のコンサートは、松永さんが自ら企画。その名の通り、安室奈美恵や「モーニング娘。」の振り付けなどで知られるダンサーのRYONRYON（リヨンリヨン）さん、人気アカペラグループ「ラグ・フェアー」のメンバーで、ボイスパーカッションを担当する奥村政佳さんがステージに登場し、松永さんのピアノに合わせた独創的なパフォーマンスでオーディーエンスを楽しませた。

松永さんは5年前、オーケストラとダンスを融合したステージ、シンフォニック・バレエ「ラプソディー・イン・ブルー」で若手のバレエダンサーたちと共演。ダンスの持つ高い芸術性に初めて触れた。「一緒にやっていると、大きなエネルギーを感じる。これは負けていけないと思って」。以来、ダンサーをはじめ、さまざまなジャンルのアーティストたちと積極的にコラボレートしている。

「30歳までに自分の活動範囲をどんどん広げていきたい。変化しながら、新しいものを求めて挑戦を続けられれば」と目を輝かせる。

芦屋のコンサートでもう一つ松永さんが発案実現したのが公開リハーサルだ。対象は、音楽やダンスに興味がある中学、高校生。本番直前の30分間、500円で見てもらった。

「プロのリハーサルを聴いたり、見たりする

## 一緒にやっていると、大きなエネルギーを感じる。



ピアノは約100年前のスタインウェイ社製  
=芦屋市東山町、レフトアローン



ピアニストの手  
長い指が流麗なメロディーを奏でる

のって一番勉強になるんですよ。公開することで、若い人たちが将来、音楽家やダンサーを目指すきっかけになってくれればうれしい」  
そうした思いには、ジャズピアニストを目指すきっかけとなった、自身の体験が深く影響していた。

## ジャズの街が開花させた才能

幼いころからピアノや電子オルガンに親しんできたという松永さん。小学校高学年になると、ジャズファンの父親に連れられて訪れた神戸、阪神間のライブハウスで、本格的なジャズの生演奏に触れた。

「音楽やっている人ってなんてかつこいいんだろう」。ピアニスト、ベーシスト、ドラマー。目の前で演奏するジャズプレーヤーの姿が少年をとりこにした。家にあつたピアノに向かい、ライブハウスで目の当たりにしたプロのピアニストの姿を思い出しながら、見よう見まねで指を動かしていると、不思議と弾けるようになったという。

「人前で演奏したい」。そんな松永さんの願いを、地元芦屋にある「なじみ」のライブハウス「レフトアローン」（芦屋市東山町）がかなえた。譜面立てに美しい装飾が施されたピアノで、ジャズの名曲「スペイン」や「オン・ダリン・ドルフィン・ストリート」をソロやトリオで演奏。耳の肥えた常連のジャズファンから拍手喝采を浴びた。

評判は瞬く間に広がり、ライブハウスで飛び入り演奏したり、神戸で開かれたジャズフェスティバルに出演したりと一流のプレーヤーたちも注目。ジャズピアニストの道を歩み始める。

中学入学を前に、関西を代表するアロージャズオーケストラの北野タダオさんに師事し、音楽理論やコード進行などを学んだが、「演奏は独学。ライブなどでプロの指使いや音の出し方を間近で観察、まねをすることから始めて練習を積んでいった」

天才の名をほしいままにした松永さんだが、類いまれな才能の開花には、ジャズが息づく神

戸、阪神間という土地柄、若きピアニストを快く受け入れた地元ジャズファンのサポートが欠かせなかったに違いない。

だから自分も次の世代のために役立ちたい。コンサートでの公開リハーサルは今後も続けようと考えている。「子どもたちが生の演奏を聴く機会をつくれれば。学校とも連携できたらいい」と夢を描く。

## 経験に突き動かされた支援活動

ジャズと出会い、ピアニストを志し、プロデビュを飾った地元芦屋だが、生涯忘れられない過酷な経験もした。1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災。当時、松永さんは小学3年生。沿岸部にあった自宅マンションは倒壊こそ免れたが、地盤沈下によって傾いた。

救援物資を受け取りにいった近所の避難所には、各地から駆けつけた若いボランティアたちが活動していた。その姿が「ヒーローのようにとても頼もしく見えた」という。

昨年3月11日、東日本を襲った大震災。「あの時のボランティアと同じ世代になり、今度は自分が子どもたちに何かしてあげられないだろうか」。松永さんは、17年前の経験に突き動かされるように4月初め、寝袋やリュックサックを背負い、1人で高速バスに乗り東北の被災地に向かった。

## 僕らが声を上げ、行動していかないと



岩手県内の被災地で、子どもたちにお菓子を配る  
(松永さん提供)

仙台市を経て、友人がボランティアとして活動していた岩手県へ。甚大な被害に見舞われた大船渡市、陸前高田市へ救援物資を運んだ。避難所を回り、子どもたちにお菓子を配ったり、お年寄りの話し合い相手になったりした。ピアノを演奏することもあった。

5月には、知人のアーティストらに呼び掛けて芦屋でチャリティコンサートを開催。収益は市を通じて被災地に送った。「今後も継続的にチャリティイベントを開き、被災地、被災者を支援していきたい」と話す。

最近のライブではそんな思いを込めて、被災地を訪れた後にできた「君へ」震災復興支援ソング」を、復興後の神戸の夜景をイメージした「神戸」とともに必ず演奏している。

「忘れないこと、語り継いでいくことが大事。」

阪神・淡路を経験した僕らが声を上げ、行動していかないと

◇ ◇  
CDデビューから10年を迎える来年は、ニューアルバムリリースや全国ツアーを計画。「地元兵庫でも節目の年にふさわしいイベントを開催できれば。チャンスがあったら海外公演も」と意欲を燃やす。

「オリジナル曲を評価されたことが、CDデビューにつながった。これからは自分の作品を創り出していくということに、もっと力を入れたい」。音楽に対するピュアな気持ちは、ピアニストのかけこよさに心を奪われた、小学生時代と変わっていないようだ。

(神戸新聞社東京支社編集部長 志賀俊彦)



コンサートでは、阪神・淡路、東日本の両大震災をモチーフにした2曲を必ず演奏する＝芦屋市業平町、市民センター・ルナホール(市民センター提供)